「高齢者住宅新聞」2012年6月15日号に インディペンデンスヴィレッジ成城西の連載 第2回目が掲載されました。（全6回）

今回は四田由喜枝様へのインタビューです。

健やかLife 高齢者住宅の日常

第2回 芸術家夫婦の老老介護

「ここで夫を看取る」 3年間介護で支え

四田由喜枝さん（82歳）は、翻訳中の児童文学書を見せてくれた。月に1回ずつ、入居前から活動を続ける原書を読む読書会サークルと児童文学研究会に参加し、買ったばかりの電子辞書を片手に楽しく読み進めている。

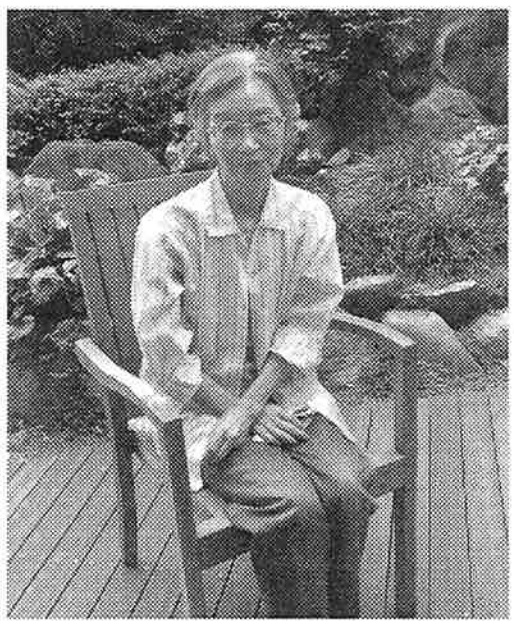
四田さんは8年半前に夫・淳三さんとともに入居。夫は雪山を多く描いてきた日本画家だ。四田さんは夫の画家活動を支えながら、子育てがひと段落した40代に入って児童文学の翻訳家として活動を開始。イギリスの作家アイリーン・コルウェルに魅せられ何作も日本に紹介してきた。

夫は日本画家、自身は翻訳家として芸術活動に勤しむ日々が続いた。時に四田さんは夫の写生に付いていき、雪山にこもったこともしばしば。キャンバスに向かう夫の気迫ある後姿が今も瞼に焼き付いている。◆

夫・淳三さんは一昨年12月に82歳で亡くなった。53回目の結婚記念日だった。脳梗塞の後遺症によるパーキンソン症候群で歩行困難となり、四田さんが3年半ほど介護をしていたが、身体的にも精神的にもつらい日は決して少なくなかった。

「介護が必要になって、このマンションにも住み続けられないと感じていた。マスメディアが介護施設を取り上げはじめ不安も高まっていたので、いよいよ有料老人ホームに移るかと考え始めていた」

その頃マンションでは入居者の平均年齢が上がり、介護が必要な入居者への対応も急務で、支援体制づくりが進められていた。



四田由喜枝さん(82)

「マンションが提携の医療機関や介護サービスとネットワークを作り始めていて、介護が必要になってもマンションのスタッフが支えてくれることを知り、ここに二人で暮らし続けようと決心がついた」

当時四田さんは70代後半で、夫の身体を支えるのがやっと。マンションのスタッフが訪問介護、デイサービス、訪問診療などケアチームを作り、スタッフが定期的に運動やコミュニケーションを図ろうと自宅に足を運んでくれたり、介護について相談に乗ってくれたことは夫だけでなく四田さんの支えにもなっていた。

「夫が要介護5になり、娘たちには『お母さん、もう限界だよ』と心配されてばかりだった。だが、夫はいつも『ありがとう、悪いなあ』と言ってくれる。自分がつらくなると、絵を描く夫の姿が頭に浮かび、自分を奮起させてくれた」

夫の最期は深夜。トイレに起きたその時だった。四田さんは夫の異変に気が付き、マンション内に常駐するスタッフを呼び、救急車に乗り込んだ。病院にはほかのスタッフも自宅から駆け付けてくれたが、そのまま帰らぬ人に。心不全だった。

「夫はかねての希望通り、自宅で最期を迎えられた。入居者の中で私が一番、このマンションにはお世話になっているかもしれない。夫が亡くなってからは相続のことで頭がいっぱい」

今はマンションのスタッフに手伝ってもらいながら相続の対応を進める一方で、「『ありがとう』を言えるときに」と、娘たちに向けた自分のエンディングノートを書き始めた。

【取材協力・インディペンデンスヴィレッジ成城西】
東京都狛江市。生活支援付きの高齢者向け分譲マンションとして平成15年に竣工。全68戸。

※毎月15日号に連載します。